

(*はリポジトリ非登録箇所を示しています)

中京大学国際教養学部講演会

外国語学習者への認知科学者からのメッセージ — 効率的で、効果的な外国語学習法をめざして —

講師：慶應義塾大学 大津由紀雄氏

日時：2009年12月3日

司会：

皆さんこんにちは。安村と申します。本日の講演会を主催する国際教養学部の教育事業推進委員会の委員長を務めております。学生の皆さんがよりよい、実りある勉強ができるようにとの願いのもとに、昨年が続いて講演会を企画いたしました。今回は、「外国語を習得する」ということにテーマを絞ってお話を伺います。

それでは、最初に国際教養学部の学部長の伊藤先生にご挨拶をしていただきます。

伊藤学部長：

皆さんこんばんは。いま安村先生からお話がありましたように、今回国際教養学部主催の講演会の2回目を迎えました。今回は、認知科学の第1人者であられる大津由紀雄先生に講演をお願いすることができました。大津先生はたいへん多忙な方なのですが、今日は特別に、皆さんに外国語学習について講演をしてくださるということで来ていただくことができました。私のほうからも、大津先生には心からお礼を申し上げたいと思います。

昨年は、国際教養学部の開設の年で、卒業生もまだ一人も出ていないという状況だったものですから、今の2年生の学生諸君向けに、「就職する」ということを意識してもらう意味で、働くことの意義であるとか、働くということはどういうことなのかといったことを中心に講演をしていただきました。今回につきましては、国際教養学部の大きな柱の一つである「外国語学習」について、皆さんの参考になるようなこととお話いただける方として、大津先生をお迎えしたわけです。

また、外国語学習への関心は何も国際教養学部の学生だけのことではなく、国際英語学部とか他学部の学生さんにも共通することですので、言語に関心のある方であれば広く来ていただこうということで、今回は全学部に向けてもご案内させていただきました。

大津先生は言語教育についても積極的に発言されていらっしゃいますので、言語学習に関心のある皆さんにとって必ず多くの参考になるお話をしてくださると、私自身非常に楽しみにしているところです。

講演が終わった後には、皆さんの方からどんどん意見や感想や話をしていただく時間が取っております。昨年は熱心な質問がたくさんあって講演の先生が帰れないくらいでした。今年も、皆さんの身近な話題ですので、ぜひ大津先生からどしどし学習法について聞いていただければと思っております。

では、お話をうかがう前に安村先生から講師の大津先生についてご紹介をしていただきます。

司会：

すぐにお話いただきたいのですが、少しだけ先生のご紹介をさせていただきます。

大津由紀雄先生は、慶應大学言語文化研究所教授をなさっておられます。それから、東京言語研究所の運営委員長、言語科学の会の前の会長さん、日本英語学会理事、前の副会長さん、日本認知科学会の元会長さんと、ものすごく偉い方のように、お堅い先生のように聞こえるかも分かりませんが、ホームページでちょっと読ませていただきましたら、「(趣味は) 首尾一貫して都はるみ」と書いてありました。また、「学生さんと話をするのが大好きだ」とおっしゃる先生ですので、今日は「認知科学」という難しいような題がついていますが、分かりやすくお話をいただけることと思っております。

1時間ほどお話いただきましたら、引き続き10分間ぐらい全体で質疑応答の時間を取ります。普通はそれで終わりなのですが、先生からは、その後は教員の方々にはご退出いただいて学生の皆さんとだけで20分ぐらい話をしたいと、おっしゃっていただいています。学生の皆さんには楽しみにして聞いてください。

それではよろしく願いいたします。

大津：

皆さんこんばんは。

フロア：

こんばんは。

(拍手)

大津：

ご紹介いただきました大津です。肩書きをたくさん並べる人にろくな人はいないので、先ほどご紹介いただいた肩書きはぜひ忘れてください。

それで、早速なのですが、これは誰だか分かりますか。

分かる人？ 誰でしょうか？

フロア：

本居宣長。

大津：

そうですね。本居宣長です。

それで、外国語の学習法の話なのになんで本居宣長が出てくるのかとお思いでしょう。皆さんのお手元にもあります、彼の書いた文章を読んでください。

又、いづれのしなにもせよ、学びやうの次第も、一わたりの理によりて「云々してよろし」とさして教へんは、やすきことなれども、そのさして教へたるごとくにして、果してよきものならんや、

本居宣長の図版

又思ひの外にさてはあしき物ならんや、実にはしりがたきことなれば、これもしひては定めがたきわざにて、実はただ其人の心まかせにしてよき也。

これじゃあ取っつきにくいでしょうから、現代語訳をお見せしましょう。

どんな学問でも、その学び方の次第を、通り一遍の理論でもって、こうすればいいと教えることはたやすい。だが、教えられたとおりに実行して、はたしていいものなのか、思いがけず悪いものなのか、じつはそんなことは予測できない。だから、これも、他人がそれと決めることはできない。結局は、本人が決めることであろう。

という、学習法について講演する者にとって、はなはだ都合なことが書いてあります。

きょうのテーマは「外国語」学習ということですがけれども、多くの人たちにとって身近なのが「英語」学習だと思いますし、わたくしも自信を持って語れるのは英語学習についてですので、英語学習法を具体例としてお話しします。でも、今回お話しすることは他の外国語学習の場合にも（ほとんど）そのままあてはまると思います。

ちょっと大き目の本屋さんに行きますと、英語学習法の本棚というのがあって、たくさん本が並んでいますよね。

『英語学習最強プログラム』だとか、『究極の英語学習法』だとか、『達人の英語学習法』というのがあります。『韓国人のすごい英語学習法』なんて、ほんとうにすごそうなものまであります。そうすると、我々は日本人だということで、『日本人に一番合った英語学習法』なんていうのが対抗して出ます。最近出た本の中には『社会人のための97%失敗しない、最後の英語学習法』なんていうのがあります。

この「97%」というのはずるいですよ。この本を読んで、そこに書いてあることを実行して失敗しても、その人の例はその「97%」に入っていないくて、残りの失敗する3%の中に入っていたのだという言い訳がききますからね。でも、一般の人たちはこうやって「97%」なんて書いてあると、効果があるものと信じて、そして、それを買ってきて実行して、たいがい失敗するのですね。

英語学習法に関する本 6点の表紙の図版

ここで、きょうの話の後半に出てくるキーワードについて説明しておきます。それは「メタ (meta-)」ということばです。「メタ」というとちょっと仰々しいのですけれども、簡単に言えば、「メタX」というのは「Xについての」ほどの意味です。たとえば、「効果的な英語学習法」について考えてみましょう。さっき本居宣長が言っていたように、英語学習法について学んでも、英語が上手になるという保証はありません。効果的な英語学習法の本をたくさん読めば、「効果的な英語学習法」について学習することにはなるが、決して英語を学習することにはなりません。分かりますか？つまり、「学習法についての学習」---それは「メタ学習法」ということになります。

さっきご覧に入れたように、要するに、この世の中に英語の学習法や外国語学習法というのはたくさんあって、言ってみれば著者の数ほど学習法があるというのが本当のところでは、ということ、ここから学ばなきゃいけないのは、『効果的な学習法』などというものはないということだろうということ、こういう知恵が非常に重要だということ、なのです。

でも、そんなことを言っていたら、「効果的な学習法」というきょうの講演が成り立たなくなってしまうし、せつかく呼んでいただいてこれだけのたくさんのかたが聞きに来てくださっているのに、それじゃああまりに無責任ですから、こう言い換えることにしましょう。おとなの結論です。

それは、「このやりかたで英語を学べば、誰でも英語が身につくという、万人に向く英語学習法はない」ということです。ここで「英語」と書いてあるところは、一般的に「外国語」と置き換えてくださって結構です。さらに、きょうは「認知科学・学習科学・科学からお手伝いする」という副題がついていますけれども、科学が英語学習について手伝える部分というのは、極めて限定されています。しかし、みなさんお一人お一人が自分に合った学習法を編み出す上でヒントになるかもしれない、決して体系的にというわけではないのですが、理論知とか科学知とか呼ばれるものもそれなりに実践に役立つ部分もあるとわたくしは考えているので、そんなところをきょうは見繕ってお話をさせていただいて、そして、それを大いに利用しましょうというわけです。

繰り返しますが、その利用の仕方というのは先ほどの本居宣長が言ったように、皆さんお一人お一人が決めるべきことで、わたくしが「こういうふうにご利用下さい」と強いるという話ではありません。

それで、いま「科学知」という話が出てきましたけれども、もう一つ、「実践知」というものもあります。「実践知」は場合によっては「経験知」と、「科学知」は場合によっては「理論知」と呼ばれることもあります。

Noam Chomsky (ノーム・チョムスキー) という著名な、そして、重要な仕事をしている認知科学者がいます。主に言語の畑で仕事をしている人ですけれども、この人があるところでこういうことを言っています。ちょっと長いですが拾って言いますと、最初のところで「言語教育とか翻訳とか橋梁建設」---「橋梁建設」というのは橋を架けることですが、---「そういう実践的行為に携わっている人たちにとって、関連する科学でいったい何が起きているのか、そして、どこまでが明らかにされているのかということに目

を配っておくというのは重要だ」と。

つまり、言語教育の場合なら、言語学とか心理学とか教育学とか、それから、後でお話する認知科学とか、そういった関連する科学の分野でどういうことが行われ、どういう成果が上がっているかということに目配りをしておくことは大切だということですね。

しかし、「そうした科学的な知見、理論的な知見に縛られすぎてはいけない。どうしてか」というと、実際に何をしているのかを意識的に捉えることはできなくても、そのような実践的な行為を遂行する能力というのは、科学的知識よりもずっと進んでいることが普通だからです」と続きます。

例えば、地震にも強くて簡単には崩れないような橋を架ける技術というのは、人間がずいぶん昔から開発していました。でも、開発されてそういう橋が架けられるようになった最初から、「なぜそういう橋を作ると簡単には崩れ落ちないのか」という理屈を与えてくれるような、そういう物理学の理論というのが最初から整備されていたのではありません。つまり、「簡単には崩れ落ちないような橋を架ける」という実践のほうが、物理学理論に先立って行われているわけです。

言語教育の場合も同じで、なぜそういう学習の仕方をする、あるいは、なぜそういう教え方をすると効果的で効率的な英語学習が、あるいは外国語学習ができるのかを体系的に説明できる理論はまだ無いのだけれども、しかし、実際に教育に携わっている先生がたは、「こういう教え方をすると効果的だ」とか、あるいは学習者自身が「こういうやり方をする」と学習がうまくいく」ということを、実践を通して知っているということがよくあります。だから、あまり言語学だとか心理学だとかといったような科学的な知見というものに縛られすぎてはいけない、頼りすぎてはいけないということです。

もう一つの例は、これはアルキメデスの話ですけれども、アルキメデスがこの原理を発見したのは確かだけれども、「てこ」そのものはエジプト時代から使われていました。これも実践が理論に先立っていくという話です。

きょうこの後お話するのは、科学が外国語学習に対してお手伝いできるかもしれないというヒントをいくつか見繕ってお話をしますけれども、しかし、それはあくまで理論知・科学知であって、それをどうやって使ったら効果的な、効率のよい学習ができるのかというのは、皆さんお一人お一人の知恵に委ねられているのだということになります。

以上の注釈を前提にした上で話を進めます。英語学習法と関連する科学、これはいろいろなものがありますが、きょうはそのうちの二つ、わたくしが馴染みのある科学を二つ述べたいと思います。

一つは「学習科学 **learning sciences**」といいます。英語ですと **sciences** と最後のところに複数語尾の “s” がくっついてますね。こここのところに注意が必要で、何か単一の学習科学という理論があるわけではなくて、今のところは学習についてのいろいろな考え方、あるいはいろいろなアプローチの仕方によって得られた知見を取りまとめたという、その程度の科学です。簡単に定義をすると、「学習を科学的に捉えるための学際的な研究分野」ということにでもなるのですが、こんな定義があっても大して役には立ちませんけれどもね。要するに学習ということを科学的に探っていこうという科学になります。

もう一つ、「認知科学」というものがありますが、これは **cognitive science** と単数形で使われるときも、**cognitive sciences** と複数形で使われるときもあります。これは認知科学に対するその人のスタンス、姿勢によって、あるいは現状の評価の仕方によって変わってきますけれども、少なくとも「単数形で使う人がいる」ということから判断して、統合された単一の科学を目指すという雰囲気を感じられます。

さて、「認知科学」とは一体何かということになりますが、これは一言で言うのは難しいことです。そこで、関連する概念のきわめておおざっぱな定義から始めましょう。まず、「心 **mind**」ですけれども、「心」とはわれわれ人間一人一人の中に備わっている仕組みで、外界、つまり、われわれの外側にある世界と我々の内側にある世界の間の情報のやりとりを支える仕組みであると考えてください。その心の「構造」、どういう仕組みになっているかということと、それから、「機能（働き）」を探る学際的な研究分野――これが認知科学です。ですから、「心の科学」と言いかえてもかまいません。

あ、順を追って説明をしていきますので、まだ漠然としている部分が残っていても心配することはありません。

さて、外国語の学習をするときですが、もちろん先生がたからいろいろなことを教えていただきます。あるいは参考書・教則本等を読んで、学ぼうとしている言語についていろいろな情報を得てきます。言うまでもなく、これは重要なことです。しかし、外国語の学習というのはそれだけで成り立っているわけではなくて、実は学習者の中では自分自身が持っている力を使っているいろいろなことが起きる。その力というのがまさにさきほどいった「心 **mind**」というものなのです。ちなみに、心の構造と機能を探る学際的な研究分野を「認知科学」と呼ぶのは、心の機能、心の働きのことを「認知 **cognition**」と呼ぶことからきています。

きょうは認知科学のいろいろな考え方、アプローチのうちで、「生成文法」と呼ばれている言語理論、先ほどちょっと話題に出た **Noam Chomsky** ですけれども、その人の始めた言語理論についてお話していきます。この理論はとてもきっちりと組み立てられたものなので、その考え方そのものをきちんと説明するとなると、たくさんの時間が必要になります。そこで、きょうは心への迫る生成文法の基本的姿勢のようなものを下敷きにしながら話を進めていきたいと思えます。

これからの話を理解していただくときに、どうしても先に押さえておかななくてはいけないことがあります。それはことばを身につける三つの形態というものです。

この表の左のところに「母語・第二言語・外国語」とあって、これが三つの形態に当たるのですけれども、この三つの形態を区別しておくということが非常に重要だということです。

ことばを身につける3つの形態

	母語の存在	日常的 触れあいと 必然性	開始時
母語	なし	あり	無意識的
第二言語	あり	あり	無意識的
外国語	あり	なし	意識的

最初に「母語」というのがありますが、これを定義しておく、「生まれてから一定期間触れていることによって、自然に身についた言語」となります。「触れている」という部分は、「耳にしている」と置き換えてもかまいませんけれども、日本手話とかアメリカ手話といった手話を母語として身につけることもありますから、その場合に「触れている」というのは、「目にしている」と置き換えられることとなります。

「自然に身についた」というのは、とくに意識することなくということです。ですから、この定義に従って皆さんの母語を考えていただくと、たぶん多くのかたは日本語が母語だということになると思います。日本語を母語として身につけていくときに、「きょうはこういう単語を覚えた」とか、「きょうは連体修飾節を身につけた」とか、「きょうはこういうサ行変格活用を身につけた」といったことを意識することはなく、とにかく日本語を耳にしているうちに自然に身につけてしまった。これが母語です。

もう一つだけ注釈を加えておくと、この規定の中に「国家」ということばは出てきません。従って「母語」という概念と「母国語」という概念は別のもので、この話の中で重要なのは、母国語ではなくて母語ということになります。ですから、イメージしていただければ、赤ちゃんの言語学だということになります。

もう二つあります。「外国語」というのがあります。これはわたくしたちというか、少なくともわたくしはそうだったのですけれども、英語学習というのがそれにあたります。それは母語の場合とだいぶ違って、わたくしの場合だったら中学校に入ったときに学校で英語という時間があって、そこで先生から「英語の発音というのはこうするのです」、それから、「英語の単語にはこういうものがあります」、そして「英語の文というのはこうやって組み立てます」というようなことを意図的に、体系的に教えられて、それに従って身につけていくこととなります。学ぶ立場からすれば、意識的に学ぶということになります。母語の場合とは違って教室をいったん離れてしまうと、その言語、わたくしの場合だったら英語に触れるというようなことはほとんどなくて、母語である日本語の世界が開けてくるというかたちになります。

こんな具合に、母語と外国語は違いがはっきりして際だっているので分かりやすいのですけれども、真ん中にある「第二言語」というのがちょっと曲者で、イメージとしては「日本人駐在員の子どもの英語学習」、もうちょっとちゃんと言うのだったら「日本語を母語として身につけた駐在員の子どもの英語学習」を思い浮かべて下さい。

例えば、日本で生まれた子どもが2歳になった。それまでの間はずっと日本語に触れていますから日本語が母語として定着しつつあるわけですがけれども、今度は別の言語、たとえば、英語が使われている環境に移住するということになったとします。どこでもいいのですけれども、例えばアメリカのボストンに移って、そこで英語に触れるということになったとします。多くの場合、しばらくすると、その子は母語の場合と同じように、かなりの部分無意識的に英語が使えるようになります。そうやって身についた言語のことを、「第二言語」と言います。ですから、第二言語というのは母語の場合とすごくよく似ていて、意識的ではなくて無意識的に、そして、それが使われている環境で自然に身につく言語ということになります。

それで、また最初の表に戻りますけれど、この列に「母語の存在」というのがありますけれど、それぞれの言語を身につけるときに母語というものがあるかないかという話で、母語を身につけるときはもちろん母語はありません。しかし、第二言語、外国語の場合にはもうすでに母語が身につけています。

それから、2番目の列に「日常的な触れ合いと必然性」というのがあります。さっき「一定期間触れている」ということを母語について言いましたけれども、身につけようとしている言語と日常的に触れ合うことがあるのか。それから、その言語を身につけないと生活がにっちもさっちもいかなくなってしまうという意味での必然性があるかないかということです。

母語と第二言語の場合には「日常的な触れ合い」というものがありますよね。そして、それを身につけないと生活がにっちもさっちもいかなくなってしまう。しかし、外国語の場合には多くの場合は、そういった触れ合いも日常的ではないし、それから、必然性というものもあまりないのが普通です。もちろん、使えるようになったらいいというような憧れはあるかもしれないし、ある程度身につけないと単位が取れなくて大学を卒業できないというような必然性はあるかもしれないけれども、母語とか第二言語のようにその言語を身につけないと生活がにっちもさっちもいかなくなってしまうというような、そういう強い必然性はありません。

最後の列に「開始時」と書いてありますけれども、少なくともその言語の獲得、学習を始めた最初の頃は、母語とか第二言語の場合には無意識的にことが進みます。つまり、自分がいまどういう知識を身につけているかということ意識することなく、自然にことが進んでいってしまう。それに対して外国語の場合には、先ほどから言っているように意識的であり、そして、意図的であるということになります。

こうやって整理をすると分かっていると思うのですが、一般的に世の中で考えられているのは、こんなくくりなのですね。つまり、母語を身につけるとというのが一つ。それから、それに対して第二言語・外国語を身につけるとというのがもう一つ。たしかに第二言語・外国語はもうすでに母語が存在しているというところで共通点はあるのですが、しかし、ほかの部分は違っています。

このところをちゃんと押さえておかないと、例えば日本で英語を外国語を学習をするときに母語や第二言語の場合と同じように、「始めるのが早ければ早いほどいいのだ」というような議論がなんの反省もなくまかり通ってしまうという間違いを犯すことになります。ですから、くくりということであれば、こういうくくりですね。母語と第二言語というのが一つのまとまりで、それに対して外国語というものがある。

ですから、外国語の学習を考えるときに、もちろん母語の獲得とか第二言語の獲得は参考になるところがあるかもしれないけれども、しかしそれとは違うという認識が非常に大切だということになります。

そういうことを念頭に置いた上で、まず学習科学が教えてくれることを考えてみましょう。学習法を考える上で大切な事として、学習科学が教えてくれることはいくつもありますけれど、先ほど言った「触れ合い」の問題があります。触れ合いの質と量ですね。外

国語の場合には母語や第二言語の場合と違って、かなり少ないのが普通ですけれども、しかしやはりある程度の量はなくてはいけないし、それから、ある程度の質を保ったようなものでなくてはならない。ここでいう「質」とは適格性（乱暴に言えば、文法的であること）と構造的な複雑さ（ある程度、複雑な構造を持った表現）の両方を含めています。

それから「動機づけ」、さっき「必然性」と言いましたけれど、その言語を、外国語を身につけるということにどういう動機づけがあるか、そして、その動機づけはどのくらい強いものなのかということですね。動機づけははっきりとしていけばはっきりとしているほどよろしい。また強ければ強いほどよい。この辺のところは皆さんにもそんなに抵抗なく受け入れていただけたらと思うんですね。

例えば、『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』（宮崎里司著、明治書院、新装版 2006 年）という、結構売れた本なんですけど、本を読まなくてもだいたい想像がつかますよね。外国人力士は本当に日本語が上手です。でも、スポーツ選手はみんな外国語が上手かということそんなことはなくて、何年も日本にいる野球選手でも日本語は全くというか、決まり文句以外は使えないという人がたくさんいますし、それから大リーグに渡った野球選手がみんな上手に英語を操っているかということそうでもない。それに比べて外国人力士というのは、まず間違いなく日本語を上手に操るんですね。

それで、どうして成功するんだろうかと宮崎さんは考えて、いろいろと取材をしたのです。結論はだいたい普通の人が考えることと同じです。力士ですから当然相撲部屋に所属することになります。そしておかみさんとか、同僚とか、仲間の力士達と生活を共にするわけですけれども、そうするとそこで日本語との触れあいというのは、もう本当に日常的になるし、そこで日本語が使えないと生活の上で困ったことがたくさん出て来る。どんなに強くてもモンゴル語だけで通して、モンゴル語でちゃんこを作るわけにはいかないわけで、どうしても日本語を身につけなくてはならないという必然性が非常に強く出てくるということになります。

ちなみに、2001 年版はこんな表紙だったのですけれど、2006 年版で文庫になったらこんなにつまらないものになってしまって、後の版はあまり売れていないようですね。初版のほうは非常に売れたんですけれど。

その理由は表紙だけじゃなく、こんなことがあるのではと邪推しています。副題に「あなたに役立つことば習得のコツ」と書いてあるのですが、今の話から分かるように、これを読んだってあまり皆さんに役立つようなヒントは得ら

宮崎里司. 2001. 『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか---あなたに役立つ「ことば習得」のコツ』 明治書院の表紙の図版と同書2006年新装版の表紙の図版

れない。単に「外国人力士はどうしてあんなに日本語が上手に話せるのかな」という好奇心を多少満たしてくれるかもしれないけれども、そこからなにかを学び取るというのはなかなか難しい。

もしなにかを学び取るとしたら、皆さんが、例えば英語の場合だったら、英語文化圏に行って英語を使わないともう生活がにっちもさっちも行かないような状況に置かれれば、英語が身につくかもしれないという程度のことですよね。それは決して「あなたに役立つ」ということじゃない。

そういうわけで、触れ合いの質と量、それから動機づけが大切ということですが、併せて「練習」が必要です。それは発音の練習とか、基本文の練習というのを繰り返し繰り返し行う、さらに、それを実際に使ってみるということが必要だということです。

これはみんなもったもたことなんですね。異論を差し挟む余地はほとんどない。それぞれの要因が外国語学習にとって重要だということは、これは学習科学に教えられなくても皆さんそれなりにご存知だろうと思うのです。ここで大切なことは、このそれぞれの要因について「パラメーターの値」というか、例えば触れ合いの質と量とか、動機づけをどういうふうに定めたらいいかということで、これは1人1人によって異なる、さきほど「万人に通用する学習法はない」と言ったのですが、まさにそれがこの点なのです。

少し具体的な例を出しましょう。いま挙げたいろいろな要因に値を設定する時に影響を与える要素の1つに「年齢」があります。

例えば、皆さんの多くは二十歳の前後だろうと思うんですけれども、そういうかたが新しく言語、例えば日本手話を外国語として身につけようと志した時と、それから、もう六十歳を回ってしまっているわたくしが日本手話を外国語として身につけようと行った時には、やはり学習法が違ってくるんですね。

同じように、「性格」というのも外せない。年齢のほうは非常にはっきりしているんですけれども、性格というのはあまりはっきりしたものではありません。直感的な言い方をすれば、外向的な人と内向的な人というふうに考えてくださっても結構です。この部分など、それこそ科学ではどうも太刀打ちができません。

それから「時間」です。その外国語の学習にかけられる時間。それから時間と出て来れば「お金」ですね。どのくらいのお金がかえられるかというようなことになってきます。それから、さっきお話ししたように、その状況、その外国語の獲得というのがどの程度切実な意味を持つか、「その程度」と言うわけですよ。その程度に応じて効果的な外国語の学習法というのは違ってきても不思議はありません。

関連して、よく言われる事として、「外国語を身につけるにはその言語を話す恋人を作るのが効果的である」というのがあるんですね。それで、わたくしも昔、学習法に関する新書を書いたことがあって、「英語を身につけようと思ったら、英語を話す恋人を作るのがいいですよ」と書きました。そうしたら、黒田龍之介さんという人が『語学はやり直せる!』という新書の中で、それはあやしいと指摘しました。

言われてみれば、確かにその通りで、わたくしの周りにも英語を母語とする人と結婚した人というのは結構いますけれども、じゃあその人達はみんな英語が上手になったかとい

うと、英語が上手になった人もいるんだけど、いつまで経っても上手にならない人もいるんですね。

気心が知れている相手に、「お前は英語をしゃべる奥さんがいるのに、どうして英語が上手にならないんだ」とぶつけてみたら、「愛にことばはいらない」なんていう返事を聞かされて、「ああ、そんなものなのか」という妙に納得したりしました。

そういうわけで、学ぼうとしている言語を話す恋人を作るというのは、さっきのパラメーターの設定によって効果的な場合もあるかもしれないけども、そうでない場合もあるし、そもそも動機として非常に不純だというふうに思います。前言撤回です。

学習科学が教えてくれるようなところで、重要なところを拾っていくとこんな事になるかと思うんですけども、今度は認知科学、とくに生成文法という言語理論が示唆するところについて整理をしてみたいと思います。

これは去年こちらで話をする機会があつて、その時にも取り上げさせて頂いた事なのですが、よく「英語学習に英文法は不要だ」ということが言われます。「英語」の部分は他の外国語に置き換えて下さい。これは完全な誤解で、しかしこの誤解というのはかなり根強く広まっています。展開としては「英文法よりも挨拶や決まり文句から始めてコミュニケーション能力をつけることが大切である」というようなことが言われています。

皆さんが学習指導要領というものに関心があるかどうか分かりませんが、例えば、昨年3月に発表されて、順次教室に導入され始めている学習指導要領というのがあって、高等学校の学習指導要領に「外国語」と部分があります。外国語といっても実質、英語なんですけれども、そこを見ますと「コミュニケーション英語」というような科目名があつて、学校教育というようなところにも「コミュニケーション」ということが非常に強く影響を与えるようになっていきます。

コミュニケーション自体がいけないということではないのですが、「コミュニケーションが大切なので、文法なんてものは二の次なんだ」という話になってくると大問題です。ここが非常に危ないのです。英文法がいらないコミュニケーションというのは一体何かということを考えてみると、せいぜいのところ決まり文句をたくさん覚えて、それでことたりるやりとりということになってしまいます。決まり文句は文字どおり決まった、固定された表現ですので、人間の言語使用、こうやってことばを使ってやり取りをしているわけですが、その言語使用の本質である創造性 *creativity* というものが入り込む余地がほとんどありません。

いまコミュニケーションということの問題にしましたけれども、これまで、コミュニケーションというのは、一般にはすごく単純なことだと思われているように感じます。「コミュニケーションというのはことばのキャッチボールだ」なんてことを言ったりする人もいるわけですが、これは実は非常に表面的な理解であるとわたくしは考えています。

たしかにことばというのは、コミュニケーションの手段、道具として使われることは間違いないかもしれませんが、それはことばの持っている本質的な意義ではありません。ことばはコミュニケーションのために生まれたわけではなくて、たまたまコミュニケーションに使われるようになった。使ってみると結構便利などころもあるのでいまでも使われてい

るだけだ、という考え方です。

そう言われて、「うそだ」と思っているかたもいるかも知れませんね。本当だということのできるだけ、分かりやすく説明しようと思います。

ことばがコミュニケーションの手段だとすると、不都合なことが多すぎるのです。1つだけ決定的というか、1番分かりやすい例は、「あいまい性の許容」ということです。ここで言っているあいまい性というのは、英語で **ambiguity** という呼ばれる性質で、どういうことかという、ある言語表現が複数の解釈の可能性を許す、要するに複数の意味を取ることができるという性質のことです。

具体的な例を出すと、例えば「3人の男性と女性がやってきた」という日本語の表現は自然な日本語の表現ですが、いろいろな意味に取れますね。「3人の」と言っているけれども、その3人というのは男性の数なのか、それとも男性と女性を合わせた数なのかということは、これだけでは分かりません。

もう一つ別の例を出すと、「太郎が好きな女の子」です。これも自然な日本語ですけれども、意味が少なくとも二通りとれます。一つは「ケーキが好きな女の子」に対応する意味、つまり女の子がいて、太郎のことを好きだという解釈と、それからもう一つは、「太郎が好きな車」に対応する解釈で、太郎がその女の子のことを好きだという意味。この二通りあります。

もし、コミュニケーションの手段というのがことばの第一義だったとしたら、こういうことは望ましくないわけです。発話意図、つまり、話し手、書き手が意図しているところが、ひょっとしたら相手に正しく伝わらない危険性があるのですね。

でも、ことばを使っていろいろとやり取りをする時に、こういう危険性があるとまずい場合、あいまい性をできるだけ除去しようとしします。完全には除去できないのですけれども、できるだけ除去しようとしします。

どのようになるかいうと、法律の文章がよい例です。法律の文章というのは分かりにくいわけです。別にわざと意味が分からないように分かりにくくしてる訳ではありません。裁判の場で行き違いが生じると困るので、あいまい性をできるだけ除去しようとした結果、こんなに分かりにくい文章になってしまったということです。それでもあいまい性というのは完全に除去できないわけです。ですから、裁判の場でその解釈をめぐって、いろいろなせめぎ合いが起こるということになります。

あいまい性が絶対に許されないという世界では、もう自然言語、つまり人間が母語としている身につけることができる言語、日本語とか英語とかスワヒリ語とか日本手話といった言語ですけれども、そういうのは諦めなければなりません。どんな場合があるかといったら、論理学がよい例です。皆さんは記号論理学というのを習ったかと思いますが、論理学の世界では自然言語を使うことを諦めるのです。

それからもう一つは、コンピューターの世界です。コンピューターは融通がきかないということはよくご存知でしょうけれども、何でああいう融通がきかない世界が展開されているかという、あいまい性が除去されているからです。そのために、自然言語ではなく、コンピュータ言語というものを開発するのです。でも、それはできるだけ自然言語に近い

方が、それを学ぶ人、使う人にとってもありがたいわけで、できるだけ自然言語に近づけようとする努力はコンピューター言語の開発者にとって非常に重要なこととなります。しかし、ここで大切なことは、コンピューター言語というのは自然言語ではないという点です。

こうやって考えてくると、ことばというのは、確かにコミュニケーションのために使われることは間違いないんだけど、それが第一義ではないのではないんじゃないだろうかと考える、それもはなから「駄目だ」というわけにはいかないということが何となく分かってもらえたのではないかと思います。

では、ことばというのが本来的には何のためにあるかといったら、わたくしは思考、考えをめぐらせるためにあるのだというふうに考えます。もちろん、思考と言語の関係というのは、皆さんもご存じだと思いますけれど、いろいろな人がいろいろな立場から発言をしています。「思考が言語を決定する」とか、「言語が思考を決定する」とか、その他いろいろな立場があります。

しかし、ここでお話することは、そのどれかにこだわる必要はなくて、大切なのは、言語と思考というものが分かちがたく結び付いている、というそのところだけ押さえてくだされば結構です。ことばというのは、思考、考える、考えを巡らしていくことを整理すること、それから思考を組み立てるということ、その過程で非常に重要な役割を果たします。

話は少し変わりますが、京都大学付設の霊長類研究所が犬山市にありますけれども、そこにアイちゃんというメスのチンパンジー、それから人工授精で生まれたアユム君という息子がいます。アイちゃんとアユム君はとても愛らしいので、いろいろな機会で紹介され、テレビよく出てきますから、ご存知のかたも多いでしょう。「ふたり」ともとても高い知性を達成しているのです。しかし、ことばだけは身につけることができません。

ある構造があったとき、その構造と同じ性質を持った、より大きな構造の一部に組み込んでいく。そして、その過程を何回も繰り返すことができる。これがことばが持つ重要な性質なのですが、チンパンジーの脳はそれに対応できません。

同じ性質を持っているのが、自然数の体系です。1、2、3、4、5…という自然数がありますが、自然数に限りがあるかという点、限りはありません。1番大きい自然数というのは無いのです。その自然数の体系を身につけることができるというのは、今わかっている範囲で言えばヒトだけです。

アイちゃんをテレビでご覧になったかたもいらっしゃるかもしれないけれども、モニター上に現れてきた数字に対して、いろいろなことができる。それを見ていると、何となく数の概念を身につけているように見えるんです。しかし、それは人間の場合と本質的な違いがあるのです。アイちゃんに1から9までを教えると、とても辛抱強いし、賢いので1から9までは身につけるのです。しかし、決して自動的に10にはいかないのです。さらに訓練をして、13までやると、13まではちゃんと身につけることができるようになります。しかし、13までいったからといって決して14にはいかないのです。

人間の場合はそうじゃないんですね。1が自然数であるということと、それに加えて $n+1$ は自然数である（ただし、 n は自然数）ということも身につけているのです。それだけ身につけると、無限の自然数の体系が手に入る。でもこれはヒトだけなんです。

その辺りのところと、さきほどお話しした思考の整理、組み立てとういうことは非常に重要な関係があると考えられます。ことばを唯一身につけることができる生物であるヒトが、ヒトだけがどうしてこんなに質の高い文化を達成することができたか、という鍵がその辺りに隠されているのではないかと思います。

いま思考と言いましたけれども、この絵を見て下さい。

独りでなにかを考えている様子の男性とその頭上で回転する矢印の図版

ここに男性がいて、何か考えているんですね、ぐるぐる、ぐるぐるぐる回っていますけど、頭の中で見えないところですけども考えていて、これは非常に重要なんですね。見えない、聞こえない、触れないっていうことを「抽象的」と言いますが、ここで展開されている抽象的な世界が非常に重要です。

これだけでは分かりにくい場合は、例えばこんな場合を考えてみて下さい。

テーブルの上にワインが置かれ、互いに見つめあう男女と、男女それぞれの頭上で回転する矢印と、男女の間にことばのやりとりを示す2本の矢印（1本は女性から男性へ、もう1本は男性から女性へ）の図版

ちょっと雰囲気が良さそうなレストランがあって、そこに男性と女性がいて、テーブルの上にはワインが置かれている。そうするといろんなことが起きるわけですが、まず男性が女性に対して何かを言う。そして「ワインで乾杯しましょう」と言います。そうすると女性がそれに対して答える。例えば、「ええ」と言いますね。

これは見える世界です。吹き出しの「ワインで乾杯しましょう」は男性の発話です。「ええ」というのは女性

の発話です。しかし、コミュニケーションというのはこれだけじゃないですね。男性が最初に「ワインで乾杯をしましょう」と言った時も頭の中でいろんなことをやっているわけです。《この人と是非お近づきになりたい》、《ワインで誘ってみたいんだけど、しかし言い方を間違えるとこいつは軽薄な奴だというふうに思われてしまうかもしれない。どうしたらいいだろうな》といった具合にいろいろな考えを巡らせて、最終的に「ワインで乾杯しましょう」と外部化したわけです。

それで、女性のほうも「ええ」と言ったんだけど、それも簡単な話ではなくて、やはりぐるぐる回っているわけです。《あの人は「ワインで乾杯しましょう」と言ったけれど、でも、一杯で済まないかもしれない。》とか、あるいは《この人、素敵そうだから、多少酔っぱらってもいいかな》とか、あるいは、《ちょっと最初のデートから酔っぱらっちゃまずいからある程度抑えておこう》とか、いろんなことを考えて最終的に「ええ」と言っているわけですね。

それで、いま矢印がぐるぐるぐるぐる回っていますけれども、このぐるぐる回っている所は見えないわけです。抽象的なんです。コミュニケーションというものを考えたときには、ここの部分ですね、見えない部分というのがとても大切であるということが分かります。

さっきもちょっと話題に出しました学習指導要領もそうなんです、教育界でコミュニケーションというのが話題になる時は、非常に危険な傾向があって、それは目に見える部

分だけを問題にしている。しかし、先ほど言ったように目に見える部分というのは氷山の一角に過ぎない。むしろ、目に見えない部分が重要なんだ、ということなのです。

《目に見えない部分が大切だ》って言った人がいましたよね。「大切なことはね、目に見えないんだよ」。星の王子様です。星の王子様はバカにしたものじゃなくて、これは結構本質について重要なことを言っているのです。

しかし、星の王子様には足りないところがあって、目に見えないこともそうなんだけど同時に目に見えることも大切なんです。言語化された部分です。

実は、言語化された部分も目に見える部分と目に見えない部分の両方があるんです。きょうはそこまで話ができないんですけどもね。目に見える部分では例えば単語と単語の並べ方、語順なんていうものがあるんですけども、これは大切なんです。だから、目に見える部分というのもきちんと操れるようになるということは大切なんだけど、同時に目に見えない部分というものもあって、この目に見える部分と目に見えない部分が相互作用することによって、ことばの世界というのが展開されている。コミュニケーションというのもそういうふうに考えなくてはいけないということを、きょうはぜひ皆さんにお伝えしたいと思っています。星の王子様も「はい」と言ってくれるんじゃないかと思います。

それで、さきほど言語使用、言語を使うことの創造的な側面ということを行いましたけれども、これは一言で言ってしまえば、人間というのは、今まで見たり聞いたりしたことがない、初めて出会う言語表現であってもちろんと状況に適合した形で自由に使うことができる。そもそも、今ここに書いたちょっとかしこまった文は、皆さん初めてお目にかかった文でしょうけれども、日本語の話者であれば、「ああ、あいつはこういうこと言いたいなんだな」ということが、少なくともおおよそは分かる。刺激の統制にも束縛されないというのは、外的な条件に左右されることはないということです。

本当は、内的な条件についてもそうなんですけども、それを話しだすと少し面倒なので、取りあえずのところは、外的ないろいろなことに左右されることはないと考えてください。

人間の言語使用と対比されるものとしてミツバチのダンスとか、あるいは、決まり文句というようなものがあります。ミツバチのダンスはご承知かと思うんですけども、働きバチが、蜜を見つけてくる。そうするとその蜜のありかを仲間の蜂に伝えるんですけども、その時にダンスをするわけです。

それで、ダンスの詳細は省きますが、とにかくあるやり方で、仲間の蜂に蜜のありかを伝えるんです。その時のやり方というのは、「この方向に、これだけ離れたところに蜜がある」という、方向と距離を知らせることによって蜜のありかを伝えるんですね。これはミツバチにとっては重要なことなのですが、しかし、ダンスでできることというのは「その場所に蜜がある」、このメッセージだけなんです。

しかし、人間の言語というのは、何語であっても、例えば蜜関係、蜜の場所関係の表現であってもいろんなことが言えます。

例えば、「あそこに蜜があるかもしれない」とか、「あそこに蜜があるに違いない」とか、それから、「あそこに蜜があった」とか、あるいは、「あそこに蜜はない」とか、これはどの言語であっても自然に簡単に表現することができます。

ちなみに、さきほど手話のことに触れましたが、手話もちゃんと日本語とか英語などの音声を伴った言語と同質の体系で、ジェスチャーとかパントマイムなどとは違います。ですから、実際にジェスチャーで、あるいはパントマイムで「あそこに蜜があるということ伝えてください」と言ったら、これくらいは何とかできるかもしれないけれども、「あそこに蜜があるかもしれない」とか、「あるに違いない」なんてことになるとお手上げになってしまいます。しかし、手話であれば、日本手話であれ、アメリカ手話であれ、どんな手話であってもこういった情報を簡単に伝えることができるのです。

もうちょっと別の例を言うと、「あそこには蜜がないとあの蜂が言った」とか、「あそこには蜜がないとあの蜂が言ったとあの蜂が言った」とか、もうスクリーンがいっぱいだったのでここで止めますが、飽きなれば、さっきのアイちゃんの話じゃないけれども、限りなく、限りなくというのは「無限」ということですが、いつまでも続けることができます。

もう1つ別の例ですと、「明日あそこに蜜があつたら結婚しよう」なんて、こんなステキなことも言えるんですけども、これは人間の言語、自然言語だけに許された特権なんです。

こういう、言語使用には創造的側面があるというのを是非覚えておいて頂きたいですね。その時に、いま言っている、創造的側面、創造性というのを保証しているのが「文法」と呼ばれるもので、文法というのは別のことばで言えば、「その言語の仕組みと働きに関する約束」なんです。だから、これを身につけないでそのことばを使うということとはできないのです。

問題は、母語の場合、それから第二言語の場合は、先ほど言ったように無意識的にこの文法というものが身につきます。脳がそういうふうにはじまれているのです。しかし、外国語の場合には、残念ながらすべてを脳に委ねるといふわけにはいかなくて、足りないところは意識的、意図的にその言語の文法というものを身につけなくてはなりません。それが「学習文法」と呼ばれるものです。

学習文法で学ぶべき基本というのはいくつかありますけれども、まず、さきほど言った語順です。それから語のまとまりの作り方です。ご承知のように、文というのは単語が一行にただ並んでいるというわけではなくて、いくつかの単語がグループを作ってまとまりになります。どうやってまとまりを作るか、それから、そのまとまりとまとまりを組み合わせる文を作るんですけども、そのまとまりとまとまりの組み合わせ方、それからもう一つ大切な事は、語彙、簡単に言ってしまうえば単語ですね。これを身につけるということが大切です。

語順について考えましょう。日本語を身につける時には「本を読む」という具合に、「読む」という行為を表す動詞を後に置いて、その前にその「読む」という行為の対象である「本」を前に置く。でも、英語の場合には逆になって、**read a book** となります。この語順をちゃんと身につけておかないといけない。

ちなみに日本語の中でも「読書」という表現があるけれども、この場合は見て分かるように英語と同じ語順になっているんですね。なぜ、「読書」は「書読」にならないかという

のは、皆さんお分かりのとおり、「読書」という表現はある時点で中国から貰ってきたものなので、中国語式に「読書」というかたちをしているのです。

「語のまとまりの作り方」についても簡単に見ておきましょう。例えば、「物理の学生」というのは「学生」という名詞を中心としたまとまりです。こうしたまとまりを「名詞句」と呼びます。

英語の場合には、**A student of physics** という作り方をしますが、もちろんこれから見てすぐ分かるように、語のまとまりの作り方というのは言語ごとに違うわけですから、それをちゃんと学ばなくてはなりません。

それから、まとまりとまとまりを組み合わせて文を作るわけですが、それも学んでおく必要があって、例えば、「物理の学生が本を読んでいる」という文は、今ここに概略を示しているようなまとまりの組み合わせをしているわけですが、どうやって組み合わせて文を作るのかということをちゃんと身につけておく。英語の場合だったら、**A student of physics is reading a book.** となる。まとまりの組み合わせ方も言語ごとに違っているのです。

そして、最後の「語彙」です。例えば、**A student of physics is putting a book on the shelf.** という文ですが、赤で書いてある **putting** というのは動詞ですね。put という動詞は、「何かを置く」という意味ですが、何を置くのか、どこに置くのかというその両方を、ちゃんと表現して言わなければいけないのです。日本語はその辺は非常に融通がきくので、すごいときには「置いた？」なんて言うこともできますが、英語では **put?** というだけですすますわけにはいきません。ですから、**put** という新しい語を身につけたらば、その語の使い方というようなものも併せて覚えるということが必要になってきます。

そろそろ終わりの時間が近づいてきました。認知科学が示唆してくれるもうひとつの非常に重要な点は、外国語の学習には母語の力を利用するべきだということです。母語の力、例えば日本語と英語はずいぶん違うというふうに思うかも知れないけれども、しかし、認知科学が教えてくれる非常に重要なことのひとつは、《自然言語、日本語であれ英語であれ、スワヒリ語であれ、日本手話であれ、すべては同質の体系だ。質は同じだ》ということです。こんなことを初めて聞く人はひょっとしたら「何て突拍子もないこと！」と思うかも知れませんが、ちょっと考えてみればそんなに不思議ではないのです。日本語であっても、英語であっても、スワヒリ語であっても、日本手話であっても、すべて人間の脳が対応できるわけです。

皆さんは、たまたま生まれてから一定期間日本語に触れていたから日本語の話者になったので、スワヒリ語の文化圏で育っていればスワヒリ語の話者になっていたはずです。

つまり、人間の脳というのは、何語でも対応できるようになっているということで、そのときにもし自然言語の質がそれぞれ全然別だということであつたら、こいかに脳が優れた情報処理の仕組みであつてもその事実を説明するのはなかなか難しく、ひょっとしたら不可能になると思います。自然言語というのは同質の体系、同質の基盤がある。だからこそ外国語を学習するときには、それと同質の体系である母語の力を利用するといいいわけです。

「母語についての知識」――「についての」と書いてありますが、きょうの話の冒頭で「メタ」

という話をしました。「メタ知識」といいますけれども、メタ知識を利用して外国語を学ぶ。ですが、母語というのは自然に身につきましたから、メタ知識の部分というのは、これは学習による支援が必要なのです。母語は身につくけれども、母語についての知識というのは、これは意図的、意識的に学ばないとだめな部分があるのです。

例えば、わたくしの場合だったら、中学校で英語を学び始めたすぐに、「人称」、「数」、「性」、「格」、「時制」、「相」、「文埋め込み」、「修飾」等々の文法概念を学びました。こういうのはみんな日本語にだってあてはまるのです。もちろんこんな文法用語は出さなくてもいいのですが、まず日本語で、それぞれの概念がどういうものであるかということ、ちゃんと意識的に学んでおく。そして、そのうえでそれを利用して外国語を学ぶということが、とても大切だということなのです。

皆さんの場合には、もう大学生になっていて、多くのかたは日本語・英語はすでに身につけていると思うので、その知識を利用しながら、こういったメタ概念をできるだけはっきりとした形で意識化する。そして、それを新たに学ぼうとする外国語の学習に生かすということがとても大切です。

ですから、まずやるべきことは、母語についての知識、そして、皆さんの場合は、すでに学んだ英語についてのメタ知識を十分に育んでおくことがとても大切です。そのためには言語学をきちんと学んでおくことがよろしいと思います。

言語学者になるわけではないので、言語理論そのものを構築していく必要はないのだけれども、少なくとも、ことばの世界の楽しさ、そして豊かさというものを言語学から学び取っておくということが必要だと思います。

これは、最近のNHKの番組で、取材班が収集してきた例で、「ここでぼくが一番思ったのは、西洋のクリスマスというのは、僕はクリスマスを特別に考えている方ではないし、日本人のほとんどがそうだと思います。」という文なのです。これは別に、特別な例を拾ってきたわけではなく、こういう文というのは、高校生や大学生もそうだと思いますが、よく使われます。

しゃべりことばでこういう文が出てくるのは避けられない部分もあるのですが、問題は書いた文章にもこういう文が出てくる可能性があるということです。これはやはり、さきほどから言っている、「メタの力」というものがまだ十分についていない人が多いということだとわたくしは考えています。

そういうわけで、ちょうど時間ですので、とりあえず話を終わります。

わたくしの連絡先は、一番上に書いてあるメールアドレスです。あとはホームページも、ブログとありますので、何かあったらいつでもご連絡ください。

どうもありがとうございました。

司会者：

ありがとうございました。母語、あるいは第二言語とは違う、外国語として言語を学んでいくうえで、認知科学からどうすればいいかということ、非常に具体的にお話いただ

いたと思います。

それでは、最初申しましたように会場の皆さんの間で10分ぐらい質疑応答の時間を持ちたいと思います。どなたでもご質問のあるかたは、手を挙げてください。

質問者1：

*

大津：

いい質問だと思いますが、多分ご想像いただけるように、例えば2005年度はこういう特徴を持った学生がいたが、2006年度はこうだということはありません。ですが、おおよその傾向といいますか、流れというのがあります。さっき最後のほうで、NHKの取材班が集めた例というのを出しましたけれども、ああいう種類の、何となく言いたいことは分かるのですけれども、文としてのかたちも乱れているし、文章としても成り立たないというような表現を、話すときだけでなく、書くときにも実際に使う学生が出てきたというのは、ふり返ってみるとやはり比較的最近の、ここ数年の傾向です。もちろん前にそういう傾向を持った学生がいなかったかといったら、もちろんゼロではなかったということではあります。ちゃんとした調査をしたわけではないのですが、私が接する学生たちの様子から判断すると、最近はそういう学生がおそらくは過半数を占めているのではないだろうかと思えます。

しかし、メタについての力というのは、幸いなことに母語の場合と違って、臨界期のようなものではありません。「臨界期」というのは何かを学ぶための適齢期のようなものですが、母語の場合は大体生まれてから思春期ぐらいまでに身につけないとだめだと言われています。メタの場合には、そういった年齢の縛りが仮にあったとしても、非常に緩やかなので、大学生からメタの力をつけようということになれば、気持ちしだいでいくらでも脳は対応してくれます。その気になれば、何歳になってもメタの力はつけられるということですね。

よろしいでしょうか。

質問者2：

*

大津：

それもいい質問で、現在、科学として答えられることはあまり多くありません。

ただ、実践知としてであれば、母語と同質なのかは分かりませんが、母語と同じように外国語を操れる状態になるということは決して不可能ではありません。それは私が言わなくたって皆さんもよく知っていることだと思います。問題は、どんな学習文法をどう利用し、どういう学習の仕方をしたら、そういう状態が達成できるかという話になります。そうなってくると、今日の前半部でお話したように、一人一人ケースは違ってきます。だから、科学としてこれがお薦めで、これをやったら必ず97%ではなくて、100% 外国語が身につきますという方法はありません。

よろしいでしょうか。

(質問の間があく。)

昨年度の講演会では、講師が帰れなくなるぐらい質問されたというので、今日出ないと私の評価にもかかわるので、ぜひたくさん質問してください。

質問者3：

*

大津：

二つ質問がありました。最初のほうの小学校の英語の話は、それこそいろいろな側面があって、喋れというのだったら、私は何日でもしゃべれるのですが、今の質問と直接関係する部分についてはこういう理解でいいでしょうか。

小学校の、5年生、6年生で、「英語活動」と呼ぶのですが、英語を導入するようになりました。そのことと母語の獲得というのは、どういう関係があるか、もっと端的に言ったら、母語の獲得に対して何か影響を与えることはないか、というふうに、置き換えていいですか。その質問に対する答えはすごく簡単で、母語に対する影響はまったくありません。

まったくないのはなぜかというと、小学校5・6年生になったときには、もうすでに母語の体系というのは少なくとも基本的な枠組みと、そしてかなりの部分の語彙というのが身についています。いま小学校でやろうとしている週に1時間、年間に35時間の英語活動、それもテレビなどで紹介されるのを見ると分かるように、歌を歌ったり踊ったりしているわけですが、母語というのは、あんなことをやったところでぐらつくような、そんなやわな存在ではありません。だから、その点については、心配することはありません。

でも、だからといって、それでいいかということ、よくないのです。小学校の時間数なん

て限られています。その貴重な時間というのを、あまり意味がないことに使っていいのかというのは、また別の話になります。それが一つです。

そして後半のほうは、高等学校でのことですね。高等学校ではさきほど言いましたように、教科の名前の中に、「コミュニケーション（英語）」ということばが組み込まれるようになりました。ただ、学習指導要領の中に、「コミュニケーション」ということばが登場したのはもっと前からです。それとほぼ並行するように、英文法というものを少なくとも科目としてはなくしてしまいました。それは、私は非常に憂うべきことだと思っています。

実は、事態はもっと深刻なのです。以前は、高等学校の英語の時間に構造的に入り組んだ、複雑な文や文章の読解が行われていました。いわゆる、「英文解釈」と呼ばれるものです。その中で、ことばへの気づき、さっきメタと言いましたが、メタ知識が豊かに育まれていったのです。

最近は教科書を開けばすぐに分かるように、大部分のところが短い文、そしてそんなに入りくんでいない文章で構成されています。ということは、残念なことに高等学校の英語の時間を通して、ことばへの気づきはあまり育ってこないということになります。私としては残念な傾向だと思っています。

よろしいでしょうか。

質問者 4 :

*

大津 :

時間を有効に使う方法ですか。これも、それこそ万人に通用するとは思わないのですが、「お前はどのような工夫をしたのだ」という質問だと理解して、私自身の工夫についてお話しすることはできます。ほかにすることがないときに、あるいは、ほかに何かをすることができないような状況で、時間を有効に使うというのがいいと思います。分かりやすく言うのであれば、例えば運転しているときは、他に本を読むとか、文章を書くなんてことはできませんね。ですが、私の場合だったら英語ですが、英語の音声を耳にすることはできるわけです。例えばそういう工夫の仕方をするというのもひとつだと思います。私自身はそういうことをしました。満員電車のなかでは、「日本の教育の現状について英語で話せと言われたら、どんな具合に話すかなあ」と考えたりします。こんなこともよくやっています。

でも、それは皆さん一人一人違うと思うので、「皆さんはそれをやるといいよ」ということではなくて、私の場合はそうだったということです。

いいでしょうか。

質問者 5 :

*

*

大津：

言語学とか認知科学の立場から言うことはあまりないのですが、日本の学校英語教育について決定的にだめなところは、原理がないことです。主義がない、哲学がない、その他そういう種類のことばに置き換えてくださって結構です。

もう少し言うのであれば、目的が明確にされていないということです。「目的」と「目標」という概念がありますが、「目的」というのはなぜそれをするかという問いに対する答えです。それに対し、「目標」というのは、その行為をすることによって、何をどこまで達成しようと考えているかという問いに対する答えです。目的と目標のうちの、第1に来るべきことは目的です。目標はあとなのです。目的が決まったところで、それに対応して、目標が決まります。

目的というのは、少なくとも日本の学校英語教育に関しては、未だにはっきりしていません。もちろん、英語教育の目的を論じた論文なんかは山ほどあるのですが、そこに書いてあることは、決して本質的な議論であるとは思えないのです。私自身は、日本の学校教育の中で、英語でも何でもいいのですが、外国語を学ぶ目的は学習者、児童たち、生徒たちの母語の運用をより効果的にこなうことができる力を育むためと考えています。

その観点から言うと、私は例えば、私が育った時代の英語教育というのは決して間違っ
てはいなかったと思っています。一般的には、成果が上がらないと言われていますが、それは嘘で、勝手な思い込み、都市伝説のひとつだと思っています。きちんとした学習英文法を身につけ、英文解釈や英作文によってその知識を活用するものでした。ただ、あの時代に欠けていたのは口頭練習だったと考えています。

質問者 5：

*

(拍手)

司会者：

申し訳ありませんが、先生がたはここでご退出をお願いいたします。ここから先は、先生と学生の皆さんだけで質疑応答の時間となります。